

第4回研究発表大会

11月6日、7日 東京大学で開催

日本災害情報学会は第4回研究発表大会を11月6日、7日の2日間、東京・文京区本郷の東京大学 山上会館で開催します。会員多数の参加と研究発表の申込を期待しています。

なお、11月7日の午後は、シンポジウム「東海地震強化地域の防災と情報」を行いません。詳しい日程は学会ホームページをご覧ください。

■参加申込と研究発表者募集

大会への参加や研究発表の申込は下記の要領で受け付けます。

1. 期日：2002年11月6日（水）、7日（木）
2. 会場：東京大学山上会館（本郷キャンパス内）
東京都文京区本郷7-3-1 電話03-5841-2320
（地下鉄丸の内線「本郷三丁目」より徒歩約10分）
3. 日程：11月6日（水） 午前 研究発表 午後 研究発表、懇親会
11月7日（木） 午前 研究発表 午後 特別講演、総会、シンポジウム
4. 締め切り：（1）参加申込：8月31日（土）
（2）研究発表テーマ申込：8月31日（土）
（3）研究発表論文の提出：9月30日（月）

※本ニューレターに差込の用紙で申込みください。

5. 論文形式：A4版の横書きで文字の大きさは10.5ポを標準とします。

第1ページは論文題目を第1行の9コマ目から書き出し、1行空けて勤務先、著者名を右に寄せて書き、1行空けて本文を書き出してください。

※詳しくは東京支部事務局にお問合わせください。

6. 提出方法：原則としてMOまたはFDをお願いします。

7. テーマ申込、論文提出先：

- ・日本災害情報学会東京支部（松尾・中村）
〒103-8430 東京都中央区日本橋本町4-9-1第9中央ビル
建設技術研究所サテライトオフィス内
- ・電話 03-3663-6890 ・FAX 03-3663-6888 ・メール tokio@jasdis.gr.jp

8. 参加費：学会員1000円、非学会員3000円（当日会場にて）

9. 懇親会：11月6日（水）午後6時～午後8時 山上会館内

大会参加者は各自で宿泊の手配をしてください

地 動 儀

長崎豪雨水害から20年 理事 高橋 和雄

昭和57年7月23日の長崎大水害は河川氾濫による都市型水害と土砂災害の2面性をもつ。

長崎県は災害直後に長崎防災都市構想策定委員会を設置し、経済の活性化、効率的な都市機能の発揮、快適な住環境の整備等の観点に立って都市の復興を目指した。これより中島川の眼鏡橋現地保存、斜面市街地の住環境整備、災害に強い道路網の整備と防災行政無線の導入、土石流予警報装置の設置、自主防災組織の育成等の防災体制が整備された。

人的被害が多かった土砂災害は抜本的な対策の対象にならなかった。建設省は、従来のハード対策にソフト対策を加えた総合土石流対策を打ち出した。斜面に人家が貼り付いた長崎では安全な場所への移転が困難で現実的な対策は取りにくい側面があった。

平成5年8月鹿児島水害や平成11年6月広島災害等を経て、土砂災害から安全を守るために危険な地域に家が建つことを事前に防止する「土砂災害防止法」が施行されている。この法律は行政と住民が情報を共有し役割分担する社会システムの構築を前提とする。長崎市でこの制度を具体化するには斜面地と開発圧力が減少した平地を連携させたコンパクトな住環境整備が必要である。(長崎大学教授)

■本学会は長崎豪雨災害シンポジウムを02年7月19日、20日に長崎市で開催する。詳しくは[学会ホームページ](#)を

シンポジウム「東海地震と災害情報」



中央防災会議はこのほど東海地震の強化地域を見直し、新たに名古屋市など96市町村を加えた。これをうけて日本災害情報学会では日本損害保険協会、日本災害情報ネットワークと共催、放送文化基金の後援を得て、名古屋市で緊急シンポジウム「東海地震と災害情報」を開催した。

会場の名古屋国際センタービル・ホールには中京地区を中心に、遠くは四国からの参加者も含めて約250人が集まる盛況であった。

シンポジウムは、まず、**溝上恵地震防災対策強化地域判定会会長**の基調講演「東海地震の現状と

強化地域の見直し」があり、溝上会長は「東海地震は兵庫県南部地震の10倍かそれ以上大きい地震である。強化地域を見直した結果、広域に被害を及ぼす地震であることがわかった」と述べ、東海地震で「直前予知」と一般に言われていることについて「この表現は間違っており、決して予知ではない。気象庁と判定会が努力をしているのは、強化地域内に細かく張り巡らされている精密な体積歪計によって前兆すべりをキャッチし、それを適切に評価することである」と強調した。

引き続きパネルディスカッション「東海地震と情報のあり方」が行われた。冒頭、コーディネーターの**廣井脩日本災害情報学会会長**から「今回の見直しで全国の市町村の1割弱に当たる自治体が強化地域となった。愛知県など新たな地域が東海地震対策をどう進めていくべきか、現在の情報のあり方に問題点はないのかなど、を提起する場としたい」との発言があった。

布村明彦・内閣府参事官は「東海地震対策というのは地震予知ができるかどうかは問題ではない。異常を発見する仕組み、情報を伝える仕組み、そして意思決定のしくみ、そうしたシステムが発動することが大事だ」

横田崇・気象庁地震火山部地震情報企画官は「平成10年に解説情報と観測情報という新しい情報を決めた。東海地震が起こる前に固着域がだんだん耐えきれなくなり、前兆的にすべり始める。その前兆すべりが検出できたときに出すのが観測情報だ。この情報が防災対策の一環として使えるかどうか大きなテーマである」

川端信正・静岡総研防災情報研究所客員研究員は「大震法ができた当初は、放送は判定会が召集されてから特別放送を始めればよかったが、解説情報、観測情報が出る前に出される仕組みになり、観測情報が東海地震と結びつくかどうか、これをどう捉え正しく伝えていくか、放送は問われることになった」

松井一洋・日本災害情報ネットワーク代表は「阪神・淡路大震災当時、阪急電鉄の広報でマスコミと対応した経験から、普段からのマスコミとライフラインの災害情報ネットワークの必要性を痛感し、関西を皮切りに各地に組織を作ってきた。強化地域になった愛知県でもそうした緊密な関係を作ってほしい」

■オフサイトセンター ただいま訓練中■

三菱総合研究所 石井 和 辻 禎之

ウラン加工施設の臨界事故を契機に、平成12年6月に原子力災害対策特別措置法（以下、原災法）が施行された。そして、事故発生時に国、自治体、原子力事業者らが参集し、迅速に対策を協議するための応急対策拠点として、オフサイトセンターが原子力事業所周辺に整備された（全国21箇所）。

事故やトラブル発生時に原子力事業者が出す通報は、協定に基づく通報、原災法に基づく特定事象発生通報（10条）、緊急事態発生通報（15条）等がある。関係各機関はこれらの通報をもとに、対策本部の立上げやオフサイトセンターへの参集等を行う。

そして、オフサイトセンターでは、各種モニタリング情報や放射性物質の放出予測に関する情報等を収集し、影響を最小限に抑えるための防護対策等を検討する。更に、事故状況や対策実施状況、防護対策に係る指示等をいち早く周知するために、プレス発表の実施及び自治体に対する住民広報の指示等を行う。

このようなオフサイトセンターを中心とする緊急時の情報の取り扱いにおいて、各種能力や技術を向上させるために、シナリオを提示しない意思決定訓練、抜き打ちの通信連絡訓練、模擬記者等を配置したプレス対応訓練、住民参加型の避難訓練等、様々な訓練を実施している。これからの防災においては、このような施設災害を対象とした取り組みも、自然災害と同様に重要な位置づけにある。

第6回理事会報告

日時 2002年6月1日（土）

場所 東京大学社会情報研究所

出席 阿部、池谷、伊藤、井野、河田、川端、高橋、廣井、藤吉 の各理事

1. 会員動向 会員現況 432人（法人）

内訳 正会員 365人 学生会員 18人 購読会員 20人 賛助会員 29法人

入退会者 入会 45人(法人)
退会 33人(法人)

2. 3年間会費滞納者の扱い

3年間会費滞納者(除名対象者)は、正会員16人、購読会員1人。(2002年5月27日現在)秋の理事会まで結論を持ち越し、その間、事務局は引続き納入要請の努力をする。除名した場合は、ニュースレター等で氏名を公表することはせず、本人への通知のみとする。再入会の際は滞納分を納入することを条件とする。

3. 01年度決算報告及び02年度予算計画

事務局作成の2001年度決算報告、2002年度予算計画は、科目建てが分かりにくくので再構成する。また秋の総会までは暫定予算扱いとする

4. 田中企画副委員長報告

緊急に学会誌編集委員会の設置をする。委員長に吉井博明氏、幹事に干川剛史氏の就任を要請。他の委員については吉井委員長に一任する。

年度内に下記のシンポジウムを開催する。

- 7月19日、20日、長崎市で「長崎豪雨災害から20年」
- 11月6日、東京大会で、「東海地震強化地域の防災と情報」
- 来年の2月1日、高知市で、南海地震をテーマに。

5. 大西広報委員長報告

ニュースレターは季刊で4回発行し、常に先進的問題の掲載に務めた。また、学会広報に役立つニュースレターを目指した。

学会ホームページは、事務局も更新作業ができるように運用・管理体制を整えた。

6. 第4回研究発表大会

本ニュースレターのP1を参照。

7. その他

会員名簿の作成、突発災害調査研究員派遣基準案の作成など。

特集

有珠山はいま、夢のエコミュージアム進行中

北海道大学 宇井 忠英



有珠山噴火災害現場の復興は従来と異なった形で始まっている。自然災害が起こった場所では自然に大幅に手を加えた復旧工事を行って、見違えるような人工景観を作り上げるのが従来のやり方であった。これは確かに復興かも知れないが必ずしも将来の防災に繋がるとはいえない。

←泥流災害を受けた 町営浴場

今、有珠山で始まっているエコミュージアム建設構想はこうした従来の行政のやりかたに一石を投じようとしている。災害情報を普及させるためには、ありきたりのパネル展示や教科書に書かれた情報を学ぶだけでは不十分である。

とりわけ火山噴火災害は他の自然災害よりも頻度が低く、その仕組みも多様だという特色がある。そこで野外の現場で自然に触れ自然の営みに親しみつつ、噴火の際に自然景観がいかに急変するか、また歳月の経過と共にどう変わってきたのか、自分で考えてみる学習が大事である。噴火によって変貌を遂げた自然景観と災害の現場はそのまま手を加えずに残し、訪れた人々にはその中の見学ルートに沿って歩き回り、自然の仕組みを実物で学習してもらおうのが望ましい。これがエコミュージアムである。

有珠山での噴火の間隔は平均して平均して 30-40 年程度である。2000 年噴火で改変された自然景観と災害の現場を見せるだけでなく、前回までの噴火の遺構もエコミュージアムに組み込むことによって、植生が失われた新火口周辺の景観が、今後 100 年もすれば 1910 年に誕生した四十三山の現在の姿となることも学ぶことができる。好奇心に満ち満ちた子供達にこうした学習の場を与えれば、おのずと自然現象を考える基礎ができて火山と共生しつつ災害を減らす意識が生まれてくるであろう。彼らが社会の中核を担う年代となった頃には次の噴火が起こり、エコミュージアムを通して学んだ火山噴火と災害の知識が役立つに違いない。つまり災害を忘れ去るための復興ではなく、次の噴火で災害を繰り返さないためにエコミュージアムを今構築しようとしているのだ。この施設は単に有珠山周辺の住民だけのための長期的な防災教育の仕掛けとして作られるのではない。全国から修学旅行にやってくる生徒達には道内の駆け足観光の一環として訪れるのではなく、ここに滞在して火山と共生する道をじっくり学んで貰うことが望ましい。

エコミュージアム構想と平行して有珠山の副読本作成計画も進んでいる。小学校高学年と中学校の総合学習の素材として有珠山噴火の仕組みや火山の災害と恩恵を解説し、子供達に火山とは何か自分で考えさせる構成となっている。この副読本から、災害に遭わないためには火山の素性を良く知りうまく付き合わなければならないことを学べるであろう。地元の子供達に限らず修学旅行生達も副読本を片手にエコミュージアムを歩き回ってほしいものだ。

(北海道大学大学院理学研究科教授 日本災害情報学会理事)

「リアルタイム豪雨表示システム」の公開から 1 年

東北大学 牛山 素行

筆者は昨年 4 月より「リアルタイム豪雨表示システム」を公開している (<http://disaster-i.net/rain/>)。これは全国の気象庁 AMeDAS 観測所の降水量観測データを利用して、豪雨発生の状況をわかりやすく示すことを目的としたもので、Web ブラウザはもとより、i モード等携帯電話からの参照 (<http://disaster-i.net/rain/i.html>) が可能である。

本システムの特徴は、全観測所の過去 20 年間の最大記録と最新観測値をグラフで容易に比較参照でき、現在の雨が各地域にとってどの程度激しいものかを直感的に理解しやすくしている点である。また、余計な画像を一切使用せず、アクセスが増えた際にも迅速に参照できるようにしている。前述のグラフも画像ではなく文字による表記である。このためか、今年の台風接近時には 1 日 2 万回以上の参照があったが、大きなトラブルは生じなかった。今後も利用者の意見を集めつつ、いろいろな情報提示方法を試みたいと考えている。

効率だけではない救援文化の構築を

時事通信 中川 和之

「これは、とても記事に表現できない」一。初日の夜、国道 2 号線を走りながら、「ここに起きていることを五感に染み込ませるしかない」と言い聞かせた。「10 年 15 年と続く仮設住宅暮らしで生涯

を終わる人が大勢でるだろう」と考えていた。

5年後、仮設住宅から最後の居住者が退去した。繁華街には人があふれ、鷹取などにどこか人の温もりを感じさせるまちなみができる。

立場や専門性を活かして支援してくれた人たち、募金箱に小銭を入れてくれた大勢の人たちのサポートがあったからなのは間違いない。

しかし、被災地に住む人たちの、負けずに立ち直ろうというやる気がなければできなかったということを、4年間の神戸勤務で出会った素晴らしい人たちから教わった。

大災害であるが故に効率だけを優先して考えるのではなく、非効率に見えても被災地の難局に立ち向かう意欲をどう引き出すのか。支えること、頼ること、いずれも簡単なことではない。この地に救援文化を作り出すために、これからもK O B Eを原点に行動を続けていきたい。

学会プラザ

秋は学会大会の季節。本学会は11月6日、7日の日程で、東京大学山上会館で開催しますが、他学会の日程は次のとおりです。

■日本地震学会 秋季大会

2002年11月11日～13日

パシフィコ横浜

<http://www.soc.nii.ac.jp/ssj/>

■日本気象学会 秋季大会

2002年10月9日～11日

北海道大学学術交流会館・百年記念会館

<http://www.soc.nii.ac.jp/msj/>

■日本自然災害学会 学術講演会

2002年9月19日～20日

宮崎大学（宮崎市）

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsnds/>

■日本火山学会

<http://hakone.eri.u-tokyo.ac.jp/kazan/jishome/VSJ1.html>

■砂防学会

<http://www.jsece.or.jp/indexj.html>

■日本地すべり学会 研究発表会

2002年8月27日～30日

徳島プリンスホテル（徳島市）

<http://japan.landslide-soc.org/index.html>

■土木学会 全国大会

2002年9月25日～27日

北海道大学

<http://www.jsce.or.jp/>

■日本建築学会

2002年8月2日～4日

金沢工業大学（石川県石川郡）

<http://www.aij.or.jp/aijhomej.htm>

■日本原子力学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/aesj/>

■電子情報通信学会 ソサイエティ大会

2002年9月10日～13日

宮崎大学（宮崎市）

<http://www.ieice.org/jpn/index.html>

近々 学会誌論文募集

学会誌編集委員会は年度内の学会誌の発行をめざし、
査読論文の募集要項などを、近々、学会HPなどで発表します。 <http://www.jasdis.gr.jp/>

事務局だより

■ 3年間会費未納者について

P2の理事会報告で書きましたが、3年間会費滞納者（会則による除名対象者）の扱いについては、11月に予定されている理事会で結論を出すことになりました。

その間、事務局は引続き努力をせよということですので、3年滞納者にはこのニュースレターに別紙のお願い状というか、督促状と振込用紙を同封しました。様子を見て別途手紙、メールでもお願いする予定です。

なお、除名をすることになっても名前は伏せることが決まりました。11人（6月28日現在）の方、ご安心下さい。

■ 今後、メールで案内、連絡も

先般、初の試みで事務局から会員にメールで一斉案内をしましたが、今後も緊急連絡事項や重要案内などはニュースレターや学会HPと並行してメールを使わせてもらうことを考えています。

メールのタイトルは、【災情学会・連絡報 000号 02.07.10】とします。

今回、秋季総会の出欠連絡用紙を同封していますが、メールアドレスの確認にも使いますので、楷書で記入し、必ず送ってください。

なお、一斉メール配信の際は、他の人のメールアドレスが分からないように、必ずBCCで送ることにします。

■ 入退会者（2002年4月1日～2002年6月28日・敬称略）

入会

（正会員） 神野公秀、佐藤忠司、酒井浩一、田中啓行、佐藤博美、竹下 修、村上 徳、田所 諭、長 征爾、赤石一英、佐藤重理、天国邦博、徳山喜雄、中根和郎、北里敏明、鈴木勇二

（学生会員） 佐藤久美子

退会

（正会員） 齊藤好晴、安藤信宏、堀 乙彦、 高橋和彦、三谷琢司、佐藤 衛、落合 隆、金子 勝、吉村隆治、吉田直紹

（購読会員） 笠原芳雄

お願い. 1 会員名簿作成にご協力を

秋の総会を目途に会員名簿を作成します。同封の用紙で名簿の素材をご提供ください。

お願い. 2 毎日が催事案内募集中

会員がかかわる災害情報関連のシンポジウムや講演会等を教えて下さい。学会HPなどでご紹介します。概要をメール等で事務局まで。

tokio@jasdis.gr.jp

編集後記

第17回サッカー・ワールドカップ（W杯）が5月31日ソウルW杯スタジアムで開幕。今世紀最初のW杯はアジアでの初開催、日韓2か国共催も初めて。日本は決勝Tに進出したが、トルコに惜敗。本誌編集中は、日本のサポーターの興奮がやや沈静化した時期だったが、世界最大級の祭典も終わった。

▼某村へのマスコミ殺到、通信障害発生・・・災害とどこか通じるW杯？（黒） ▼はじめまして！ さくらんぼ山形生まれの田中です。元気に頑張ります。（田） ▼最近は自然災害による被害だけでなく、人間が引き起こす災害も非常に多い。学会としていずれはこういったことへの対策も必要？（田） ▼W杯では、JAWOCは自然災害と人災に備えました。これからの防災のあり方だと思います。（辻） ▼三宅島の人たちが世間から忘れ去られて行く、やるせなさ。（干） ▼箱根の火山博物館が閉館？時代に逆行。（渡） ▼太めの身体につらい梅雨入り。今年もハンカチの数が2枚に増えた。（荒） ▼5月中旬、東大で「防災担当者のための集中講座」があり、熱い議論が交わされていた。（大） ▼風水害の季節を迎えた。日本では毎年多くの犠牲者が出る。ここ5年で100人を越えた年が2年も。もっと注目をしたい。（中）